

あの日あの頃 - 4

創立のころ

小野せつ子

やっと六年生まで揃うか揃わないかという誕生間もない学校も、活発に行事をこなしていました。聖母祭・展覧会・学芸会バザー等々。クリスマスは教会のミサ(当時は夜中の十二時)にも出て、歌声を聖堂いっぱい警かせたものでした。横尾先生がテープに残しておられます。皆声量豊かでボーイソプラノなどみごとでした。鈴木先生が、二号に書いておられたマルコ漁師やピノキオなどのオペレッタの他に、NHK でイタリ了的の歌を放送したりで公立学校の先生やら音楽関係の方々が、しばしば見学にお出になったりしました。

昭和三十四年に初めて六年生ができました。修学旅行は、その目的や体力など検討した結果京都・奈良へ三拍四日。校医さんもついていきました。東京を朝発って夕方やっと京都に着くという時代でした。松井旅館という古い造りの宿で、「お早うお帰りやす。」という京ことばで送り迎えされるのもいいものでした。畳に両手をついて、部屋毎の挨拶に来られる宿の女主人には、ワンダフルおばさんの愛称ができ、年々子どもたちに受け継がれて、愛称で呼ばれるおばさんも嬉しそうでした。第一

回の旅行はハミリに撮ってあるはずです。

こうして次々と学校が活動している間にも、アシジヨリーナ校長様やシスター・テレジーナは、もう一つの大仕事にとで廻っていらっしゃいました。大変な御苦労だったと思いますが、卒業が半年ほどに迫っても、中学の土地が決まらなかったのです。ある父親が心配して尋ねて来たそうですが、校長様はただ一言、「大丈夫です。」と答えられた。父親も一言、「わかりました。」と帰られたとのこと。信じられないような話ですが、信仰による確信があったから・と校長様は述懐していらっしゃいました。

神様がきっと学校を守って下さるという信仰心・シスター方先生方、御父兄、子どもたちの祈りと犠牲によって、学校が築きあげられここまで来たことは否むことのできないものと思います。

【同窓会報、第4号・昭和59年11月1日発行・から転載】